

博士(社会学)野村真理氏の『ウィーンの
ユダヤ人——一九世紀末からホロコース
ト前夜まで——』に対する授賞審査要旨

この研究(一九九九年二月御茶の水書房発行)は、副題の時期のウィーンのユダヤ人についての、社会史的思想史であり、大きな特徴は、世紀末のウィーン文化を代表するものとして有名な「同化ユダヤ人」(フロイト、シュニツラーなど)とは区別された「東方ユダヤ人」に焦点を当てたことである。第一次世界大戦で解体する前のオーストリア・ハンガリー帝国で、周辺部ガリツィア、ボヘミア(チェヒ)、ブコヴィナなどから、富と地位を求めて首都ウィーンに流れ込む東方ユダヤ人の存在を明らかにすることによって、一方では幸福な多民族国家としてのハプスブルク帝国という誤解を訂正するとともに、ドイツ・オーストリア人(オーストリア国籍のドイツ人)の中での特権的異邦人としての同化ユダヤ人の矛盾を照らし出し、他方では、ユダヤ人問題の象徴とも言うべき東方ユダヤ人が、内部の分裂抗争を含みながらホロコーストへの道を辿る姿を追跡している。

本書は三部六章と終章としての「ホロコースト前夜」で構成され、補論「一八四八年三月前期ウィーンのユダヤ人社会」とイディッシュ語を含む三八ページの「史料・文献目録」が付けられている。

「第一部 世紀末ウィーンのユダヤ人社会」は、同化ユダヤ人と東方ユダヤ人との対比による問題の開示であるとともに、ユダヤ人自身は民族ではなく多民族国家の中での調停者であるとする見方が、ユダヤ人の中にあつたことが紹介される。「第二部 第一次世界大戦とユダヤ人」では、このオプティミズムが無残に裏切られて、ユダヤ人のアイデンティティが問われるようになる過程が描き出される。それはヘルツルのシオニズムによるものではなく、敗戦と帝国の崩壊が惹き起こした外部的事情によるものであつた。この第二部は、著者が最も力を注いだところであり、本研究のなかでもユニークな部分である。著者はウィーンとイスラエルでの三年にわたる調査によって、当時の公私文書、新聞雑誌、体験者及びその家族との面接と文通によって、開戦から敗戦へ、さらに戦後の混乱へと、目まぐるしく変転する帝国崩壊の状況の中での、東方ユダヤ人の運命を照らし出した。

それによれば、開戦当初から、ガリツィアのユダヤ人はロシア軍に追われて、ウィーンに向かう難民となつたのだが、敗戦によってガリツィアを含む周辺部が他国領(ロシア、ポーランド)あるいは

独立国（チェコスロヴァキア）になることによつて、ウィーンにおける難民問題は深刻化した。外国となつた周辺部から来た難民は、生活難とたたかいながらオーストリアの国籍を取得しなければならなかつた。しかも敗戦国の首都の生活難は、難民の流入による住宅と食糧の不足によつて、旧来の住民をも巻き込み、ユダヤ人難民への反感をかきたてたのである。オーストリア政府は、外人退去令と国籍取得条件の厳格化によつて、難民の流入を阻止しようとしたし、政党も、キリスト教民主党はユダヤ教徒に対して冷淡であり、社会民主党はユダヤ人の党と見られることを恐れて問題を回避した。国籍取得の一般的条件は、オーストリアへの帰属意識とドイツ語の習熟度という主体的なものであつたが、後者について証拠書類を求めることも、条件を厳しくする方法であつた。しかし困難を決定的にしたのは、国際聯盟による民族自決原則の「民族 *people*」をオーストリア内務省が、*Rasse* と訳して、生物学的な人種の意味に解釈したことであつた。これによつて、難民として旧領土での在籍証明が困難になつた東方ユダヤ人も、同化ユダヤ人とともに、ドイツ・オーストリア人であることを拒否されて、セム人としてのアイデンティティを確認せざるを得なくなる。同化ユダヤ人が抱いていた多民族の外側に立つ調停者という幻想も、ユダヤ教徒ドイツ人という自己認識も、ともに崩壊したのである。

こうして、難民ユダヤ人が与えた衝撃は、同化ユダヤ人を含めたユダヤ人問題をドイツ・オーストリア人に投げかけることになつた。資本家にとつては「赤いウィーン」がユダヤ人のせいであり、労働者にとつては失業がユダヤ人のせいであるというように、すべての困難が、全体としてのユダヤ人に帰せられたのであつた。

「第三部 戦間期ウィーンのユダヤ人社会」では、前記のようにユダヤ人難民問題がユダヤ人問題へと拡大転化したことに応じて、ユダヤ人内部に生じた様々な対応が分析される。この時期にはウィーンのユダヤ人の間で、シオニズムの勢力が強くなり、それに対して意見が分かれた。シオニストの要求には、パレスティナ国家の建設、居住国（この場合はオーストリア）での民族的権利の主張、オーストリアの再建への参加であつたが、同化ユダヤ人は、パレスティナ国家については、ユートピアとして黙認するか、東方ユダヤ人の救済策として賛成したものの、居住国においては民族的権利の主張よりも同化を重視した。シオニストは、ユダヤ教徒の公認の組織であるゲマインデの支配と政治化を企て、伝統的及び開明的なユダヤ教徒と衝突した。こうして戦間期ウィーンのユダヤ人社会は、階級的及び宗教的に分解した上に、イデオロギー的にも社会主義、シオニズム、ドイツ民族主義（同化主義）に分裂したまま、ナチスによるオーストリア併合を迎え、ホロコーストへの道を辿るのであ

る。

東方ユダヤ人を中心にしたこの研究は、以上のような内容をもって完結しているが、欲を言えば、ユダヤ人問題そのものについての理論的要約と、脇役としての同化ユダヤ人への一層の照明が欲しかったが、それらはこの研究自体の価値を傷つけるものではなく、本書は問題意識、資料処理、文体のそれぞれにおいて卓越しており、授賞に値すると認められる。

理学博士深谷賢治氏の「微分幾何学の研究」に対する授賞審査要旨

幾何学は、この二〇年間に変貌を遂げながら大きく発展してきた。その発展を主導した研究者である深谷賢治氏は、トポロジーからシンプレクティック幾何学まで、幾何学の幅広い分野で大きな貢献をしてきており、その業績は国内はもちろん国際的にも極めて高く評価されている。

深谷賢治氏のこれまでの主要な業績は、

- (1) 多様体の崩壊理論の完成
- (2) ゲージ理論、Euler-ホモロジー理論の解明
- (3) シンプレクティック幾何学

の三つに分けて考えることができる。以下に、各々についてその概要を述べる。

(1) 多様体の崩壊理論の完成

伝統的な幾何学は個々の多様体の大域的形状の研究を目的とするが、七〇年代後半に、多様体の間に Hausdorff 距離と呼ばれる距離